普段着のわたしたち

最近購入したバッグ。底に IC カードを入れるポケットがあります。無論、改札口などでいちいち底に手をつっこみカードを出す為ではありません。

ポケット？財布？どこに入れたかしら？と IC カードを探し出し、このようにせずとも、バッグごと底を磁気に近づければ「ピッ」と通過できるのです。

なんて便利な発想だろうと感動しました。

このバッグ、しばらく手放せません。

ついに岩瀬投手の引退ですね。今年は荒木選手や浅尾投手なども引退です。

寂しくなりますね。　征阿

『友引町内会通信』はパソコンやタブレットでもお読みいただけます。検索は http://www.daigoji-temple.jp/ 「友引町内会通信」をクリックしてください。寺務局

秋の花粉症で、境内の掃き掃除をしているとクシャミがでます。私は肺活量が多いので「となりのトトロ」級の大きさです。以前商店街でしたら、前を歩いていたおばちゃんに本気で叱られました。今朝もあちらこちらの御近所の犬が元気に一斉に鳴き始めました。

写真は迷走坊さんのお師匠さんから譲り賜った「法螺貝」です。いつか華々しく法螺貝デビューを目指してもう何年も墓地で毎夕練習しています。以前は吹き始めると犬が鳴きましたが現在は一匹も鳴きません。私の法螺貝は下手過ぎて聞こえてくると人生に「やる気」が全くなくなるそうです。ご近所の木工所の職人さんも残業するのが嫌になって早く帰宅したくなるそうです。「働き方改革」に貢献しています。ご要望があれば伺います。浮気性で御盛んな御主人にもきっと効くと思います。まだ試していませんけど…。　俊徳丸

判りますかね、小さなカボチャ。ハロウィン前に花屋さんで見つけました。花に詳しい方に伺うと茄子の一種だそうです。鉢植えにしましたが、墓地の方が相応しいか。　迷走坊

移民を入れるのは悪ですか

旧いことでは並ぶものなき日本相撲協会ですが、モンゴル出身の旭天鵬やブルガリア出身の琴欧洲は、それぞれ友綱部屋と鳴門部屋の親方として今どきの日本の若者を立派な力士にすべく鍛え上げてくれています。

真面目に働いて実績を残した外国人には、定住できる制度を設け、税金・健康保険料・年金の掛け金などを払ってもらう。日本全体がこういう方向を広げて悪いですか？

政府は、「移民政策はとらない」「単純労働は受け入れない」という方針です。一方で、「日本の技術の海外移転」という建て前で技能実習生制度の分野を介護にまで広げています。それでも足りなくて、外国人留学生を 30 万人にまで増やして、週 28 時間のアルバイトを 38 時間まで認めようとしています。

ところが実態は、日本人の若者が敬遠する「3K」キツイ、キケン、キタナイ仕事を外国人に押しつけているという指摘があります。

単純労働を受け入れない理由は２つ。日本人の雇用を奪う、外国人労働者の「質」が下がる、というもの。

岐阜県の有効求人倍率は 2.03。日本人の雇用を奪うことにはなりませんし、受け入れ制度の不備を正すことで、現状のような不法滞在や目的外就労を減らすことに繋がります。

国民の大多数は知りません。大きな社会問題として噴出して、初めて気づくでしょう。

1960 ～ 1970 年代の高度経済成長期に、フランスは 3K の仕事の労働力不足を補うため、北アフリカの旧植民地から移民を入れました。ほとんどはイスラム教徒です。労働力と思っていたのが、来たのは胃袋の他に頭脳と感情を持った人間でした。二世・三世はフランス語も母国語もろくに話せず、貧困ゆえに高等教育を受けることも叶わず、恐怖と犯罪が多発する地域が各地にできてしまいました。

1973 年に初めてパリへ留学した私は実態を目にしました。今も鮮明に覚えています。

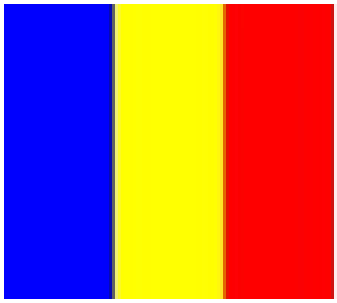
2015 年、パリ同時多発テロは、こうした移民政策の欠陥が積り積もって、ホームグロウン・テロリスト（自国で育ったテロリスト）によって引き起こされたのです。

もし日本政府が従来の建て前に終始し、なしくずし的に移民を入れてくれば、パリで起きたことがいずれ日本各地で起きるでしょう。

私たちは便利な生活に慣れてしまって、もう戦前の暮らしに戻れません。日本へ働きに来る外国人を３年や５年で追い返している制度は勿体ない。今の日本人の暮らしを維持向上させることと、外国人を受け入れることをイコールにする。その為には何が必要か？

識者の意見を集約すると、「移民庁」をつくって一元管理するのが効果的で、来年の消費税値上げの際に財源を確保しておくこと。

「上求菩提（じょうぐぼだい） 下化衆生（げけしゅじょう）（自分は覚りを求め、同時に人々を導く。自利・利他二行円満）」という教えがイコールにする智慧。子どもたちよ、今からでも遅くない、少しは佛教を勉強すべし。（遺言その１）　　迷走坊



佛教にも国際的に認められている「国際佛旗」があることを御存じでしょうか。私は佛旗には特別な「思い」があります。

青・黄・赤・白・橙(だいだい)色で配色された(文面上)の旗がそうです。ちなみに(右)写真の旗は、国際佛旗以前に我国独自で考案されていた佛旗で、緑・黄・赤・白・紫色で配色された「旧佛旗」と呼ばれるものです。京都市内の寺院の門前町で撮影しました。そのお寺の大きな法要の際に掲揚されていました。

旧佛旗は、明治維新の際「廃佛毀釈」の風潮が全国に広まり、佛像や寺院が破壊され佛教界全体が衰退しつつあった時に、「負けないで立ち上がろう！」という兆しを願いながら考案されたものであると聞いたことがあります。ちょうど私の曾祖父が住職をしていたころです。これらの風潮に加え、明治 24 年に岐阜県を襲った「濃尾大震災」で町すべてが壊滅焼失。阪神淡路大震災より大きかったと言われています。曾祖父は当寺再建のために多大な困難に立ち向かったと聞きました。

旧佛旗のデザインに用いられた配色は、お釈迦さまがお亡くなりになる際に眉間から発せられた「光」だと聞きました。曾祖父は倒壊した本堂の下敷きになりましたが、そこから這い出し、先ず御本尊を必死で探したそうです。そんな絶望的な状況にあった時にお釈迦さまから発せられた光明に導かれ最初の一歩を踏み出せたのかも知れません。ご近所、全檀家さんも大きく被災されました。曾祖父は住職を弟子にまかせ、全国をお説教に回る旅に出、再建のために僧侶として一生を奉げました。

「国際佛旗」と「旧佛旗」には多少の配色の違いはありますが、その込められている意味合いはほぼ同じものです。国際佛旗を使用しなければならない決まりもありません。それは「旗」というものは、志をもつ者がそれに立ち向う際、理屈ではなくただ「存在」すること自体が重い意味をもつものだからと思います。現在、私のお寺では檀家さん等が集まる行事が年間 16 回あります。どの際にも先ずその朝に特大の「国際佛旗」と「日本国国旗」を本堂正面に掲揚します。「日章旗」は政治的な意味に捉えられがちですが、国を築き発展、困難に立ち向かい守ってきてくださったすべての御先祖さまに感謝の気持ちを込めて当寺では掲揚しています。これら２旗が風になびけば、「よしゃ！」と口では発せませんが，すがすがしく「法要モード」に切り替えられるのも「旗」のなせる業です。

「旗」は尊く、どんな理由があってもお互い敬意をはらわなくてはならないし、それを政治に利用してはいけません。 俊徳丸

小説『恩讐の彼方に』

大分県耶馬溪の青の洞門をご存じでしょうか。禅海和尚が中心となって、山国川沿いの岸壁にノミと鎚だけの人力で掘削したというトンネルです。この実話を題材にして、菊池寛が1919年、小説『恩讐の彼方に』を発表しました。

浅草に住む旗本中川三郎兵衛の家人市九郎は、主人の寵妾と非道な恋をし、それを責める主人の刃を避けようとしているうち、手元が狂って相手を斬り殺してしまいます。主殺しの大罪に動転して、市九郎はこの女と手を取り合って逃げます。

こういう不始末をした男と女が生きる道は限られています。二人は、美人局で旅人をだましたり、命を奪って金品を巻き上げたり、非道に暮らしていました。

ある日、若夫婦を峠で殺し、金品を奪ったとき、連れの女のあざとさに今更ながら醜さを感じ、一人その場を離れ、中山道を一散に駆けます。すでに、主殺しの時点から、悪業の深さを自覚し悔いのあった市九郎は、岐阜の大垣に歩を進めたとき、たまたま目の前にあったお寺をこの場所こそ頼るところと感じ、和尚さんの元に駆け込み、おのれが犯した罪を告白します。和尚さんは市九郎を責めません。身を捨てて世の人を救うことが自分を救う道だと教えました。ひたすら佛道修行に専念し、市九郎は立派に道心を得、やがて了海という法名を与えられ、罪滅ぼしの旅に出ます。

諸国行脚の旅の途次、杖を頼りに山国川を臨む絶壁の道を通りかかったた了海は、この鎖渡しで命を落とす人がいることを聞き、自分は何をすべきか瞬時に感得します。旅人らの難儀を救うべく発願し、ノミと鎚を手に岩壁を掘り始めたのです。誰もが彼を狂人扱いし、村々を勧化してまわっても、乞食坊主の「大騙りじゃ」と寄進に応ずるものはなく、了海は一人で鎚を振るい続けます。村人の嗤りをよそに、この無謀としか思えない企ては来る年も、来る年も休むことなく続きます。

それでも、一人の力では掘り進む距離は知れています。人々には無駄と思える時が過ぎて行きます。掘り始めて十八年目がおわる頃、巡視にやってきた中津藩の郡奉行から、奇特な行いである、とことばが下され、近郷から多くの石工がやって来ます。工事は「枯れ葉を焼く火のように」進捗し、あとわずかの掘削で刳り貫きが完成するまでになります。始め笑っていた村人たちも痩せ衰えた身体にむち打ってなお鎚を振るう了海を聖と敬うようになります。

ところが、ここに至って、親の敵を探し求めて旅に出ていた三郎兵衛の子の実之助が、八年にわたる苦難の探索の末、ようやく了海こと市九郎の元にたどり着きます。

さあ。ここでお考えください。

中川実之助は、いまこそ正義の刃を振るって、「極悪人」市九郎を斬るべきでしょうか。それとも、ただ世の人を救うため、自らを捨てることに徹した「聖」了海を、掟に反し、赦すべきでしょうか。

『恩讐の彼方に』の最後に、敵同士の心のふれ合いを示す、感動的な答えが用意されています。どうぞ、時間を見つけてお読みください。

（散歩道）

『私説法然伝』（４６）

回心回天①

先月号では日宋貿易の始まりと影響について書きました。今月号はその続きについて書きます。

【新しい時代へと突入したのだ、と。その時代に生きていた人々がはっきり認識して生きていたかどうかは定かではない。現代でもそうである。ただし、どの時代でも変革の時代には人々の思考というものはその影響を受ける事が多いのは事実であると言える。平安時代とは後の時代の人間が命名した時代の名前である。その当時の人々がそう認識していたわけではない。平安時代から鎌倉時代へと移り変わったというのも、後の時代の人間がそう認識しているだけである。当時の人々がそう感じたかどうかは定かではない。しかし確実に「世の流れ」が変化した事は当時の人々でも感じ取らざる負えなかったのではないだろうか？

かつて栄華を誇った藤原摂関家の権勢も衰え、「治天の君」として絶大な権力を振るった「王家」も今や平家一門の力を頼らなければ政治体制を維持することが困難となっている。世の流れは留まることを知らずして、いつ何時変わるかもしれないものだと、人々は実感していたに違いない。

それは法然上人が身を置いている比叡山延暦寺でもそうである。伝教大師最澄開山以来、時代の中で、数多の僧侶が流れを変化させてきた。その中に恵心僧都源信の確立した浄土佛教がある。浄土佛教という流れに出会った法然上人はこれから一つの大きな流れを生み出されることになる。

承安二年（一一七二年）平清盛の築いた時代が全盛を迎えつつある頃、法然上人は四十歳となっていた。「念佛」という道を模索され続けていた、と推察される。『往生要集』によって示された善導大師の『観経疏』と向き合う日々であったのであろう。念佛に出会われてから早数年、ひたすら思索と実践を繰り返されていたと思われる。「念佛」こそが法然上人が求められていた道であるには違いない。しかし「確信」であったり、「納得」であったり、法然上人の思索の中で何か合点がいかない点があったのは間違いない。それは「誰もが必ず救われる道」ではなかったからだろうか。

ただ念佛、というのは法然上人ならば可能であっても、誰しもが可能な道ではない。南無阿弥陀佛と称えるだけの称名念佛でも、誰もができるわけではない。そこに法然上人がたどり着くべき場所の「ヒント」があった。】

以下次号に続く（征阿）

こもりうた㊻

北陸三十三観音霊場を五回（約二年半）に分けて巡拝し、先月めでたく満願しました。西国三十三観音霊場に比べて、規模の小さな寺院が多いのですが、いずれも伽藍は古く、なかなか威風堂々、古色蒼然？いや、瓦解寸前？などなど、鄙びた趣のある霊場でした。寺院や佛像は、古い方がありがたみを感じてしまうというのが日本人の常ではありますが、それを一寺院の力で維持していくことの大変さなども目の当たりにしました。今後、過疎化、少子化、寺院離れなどますます進んで行くに違いないのですが、あの佛様たちはどうなってしまうのであろうかと、他人事でなく心配になりました。そう遠く無い将来、地方の博物館や資料館は、廃寺のご本尊様だらけになるのでしょうか。

さて、帰り道に立ち寄った富山県の道の駅。『ケロリン』の風呂桶を見つけました。何やら哀愁漂う黄色の桶。早速購入しました。そして、日本国民誰もが知っているこの桶の驚異的な知名度の理由を調べてみました。

遡ること六十年前、多くの銭湯では木桶が使われていましたが、耐久性と衛生的に問題があり、徐々に普及し始めていたプラスチック製桶に変えようという流れが出てきたそうです。そして或る広告代理店の「プラスチック桶に広告を載せて販売しよう」という目論見と、富山県は「内外薬品」の「全国に頭痛薬ケロリンを宣伝、販売したい」という企てが合致して広がったそうです。最初に置かれたのは東京八重洲口の東京温泉。年間五万個、総販売数二百五十万個超。銭湯が激減している現在も売れ続けているという不思議。現在はネット販売でも購入できるので、根強いファンがあるのでしょう。銭湯で子供が蹴り飛ばそうが、大人が腰かけ代わりに座ろうが壊れないという「永久桶」の異名を持つ耐久性。風呂場で使うものなので肌を傷つけないようにと、一つ一つ手作業で研磨されている点など、質実剛健な優れモノのようです。

ケロリン
内外薬品
ケロリン
ケロリン
ケロリン

観経物語（１２３）

正宗分（しょうじゅうぶん）その77
散善（さんぜん）下品中生その３

《本文》その３

一念の如き頃に、即ち七宝の池中の蓮華の内に往生するを得ん。六劫を経て、蓮華、即ち敷く。華の敷く時に当りて、観世音・大勢至は、梵音声を以て、彼の人を安慰し、為に第上の甚深の経典を説く。此の法を聞き已わり、時に応じて即ち無上道の心を発す。是を下品中生の者と名づく。

《意味・訳文》

一瞬のあいだに、たちまちにあの極楽国の七つの宝石の水をたたえた池（定善第五観・宝池観を参照）のなかに往生することができる。それから六劫の年月を経て、蓮華の華が初めて開く。その華の開くときに当たって観世音菩薩と大勢至菩薩は高らかに澄みわたった声をあげて、この人を慰めて心を安らかにさせたうえで、大乗の神妙にして奥深い教えをもつ経典について、説き明かすのである。この説法を聞き終えると、たちまちのうちにこの上なき佛道を求めようとする心（解脱しようとする心）が沸き起こってくるのである。これを下品中生の者と名付けるのである。

《私訳》

下品中生といわれる悪人が、極楽に往生をすることができて、この上なき佛道を求める心を起こすと言うが、どのような心を起こすのか。この人は少々の戒律すら守れなかった上に悪事を重ねて来た人です。本来は地獄に落ちるべき人ですから、今度は観音勢至の説法を聞いたからには反対に、心を入れ替え、戒律を厳格に守って、身と口の汚れを取りの除き、禅定を行って意（こころや精神）を整えて、このことによって、空・無相・無願の境地に達して、正しく完全な智慧を得て、解脱に至ろうとするでしょう。このことは、出発点は大きく違いますが、佛が行った修行そのものになっていくことを示しているのです。

《妙星斎》